Kyushu Medical Center NEWS No.99

独立行政法人 国立病院機構 九州医療センターニュース 2022 APRIL

基本理念

病む人に寄り添い、安全かつ最適な医療を提供します

九州医療センターの基本理念

基本理念は2018年10月に職員全員の意見を集約して決定されました。「病む人に寄り添う」とは、常に患者さんに接して苦痛や希望を知り、患者さんの権利を第一に、ご家族や重要な関係者の思いにも耳を傾けて温かい医療を実践する姿勢を表しています。「安全」な医療とは、検査および治療成績とともに当院での成績をもとに十分な説明を行い、患者さんの理解と同意を得て、可能な限り不利益を最小限化して提供する医療です。また「最適な」医療とは、病院の総合力を生かして、いくつもの選択肢の中から患者さんの自己決定権のもとで選ばれた医療を、患者さんと医療者が協議して実践する医療です。

職員は時代の変化と患者さんのニーズに柔軟に対応できるよう日々研鑽し、医療連携を推進し、病院の健全な経営にも積極的に参画し、一丸となって基本理念および運営方針を推進します。

INDEX

1 贈る言葉 …… 森田、原田
2 退任の挨拶 …… 竹尾、宮田、山本、田畑、池尻
3 異動の挨拶 …… 河邉、中溝、濵口、山下、山下、有馬、丸山、一ノ瀬、梶原
4 新臨床研修医へ贈る言葉 …… 冨永、川本、野田、山本
5 さわやかナーシング …… 吉村佳也子
6 始めます!! 看護師の特定行為研修 …… 中村千夏子
7 ヒポクラテスのカフェ …… 吉住秀之
8 NPO法人卒後臨床研修評価機構受審を終えて …… 冨永光裕

贈る言葉

いつの日かの再会の宴を夢見ながら

今年の３月末で九州医療センターを去られる皆さま。九州医療センターでのお勤めお疲れさまでした。一昨年の２月に最初のコロナ患者を受け入れて以来２年以上の月日が過ぎてしまいました。昨年の送別の辞に私は「コロナの脅威に一丸となって闘った記憶は共通の体験として皆さんと長く共有されるでしょう」と書きました。今年もまた同じ思いで皆さんに送別の言葉を贈ることを誇らしく思うとともに、コロナが終わってよかったねと送別会で皆さんの労をねぎらうことが出来ないことを残念に思います。今年で送別会が出来ないということが３回続くことになってしまいました。この２年間、パンデミックが大きくなればなるほどそれに負けないだけ仲間としての繋がりが強まることを実感していただけに今年も送別会を開くことができなかったことが残念でなりません。来襲する度にその大きさを増すコロナの波の中で、私自身が日々鍛えられていると感じました。病院がより強靭になっていくことを実感しました。それは職員の皆さんが患者さんを守り、職場を守り、病院を守り、地域の人々を守っていただいたからだと心底感謝しています。

今年も多くの方々が３月末に当院を去られます。４月からNHOの別の施設への異動される51名の方々、また医局の人事その他の事情で当院を去られる158名の方々におかれましては当院での経験を糧に新しい施設で益々ご活躍されることを祈っています。また今年３月末日もって定年を迎えられた竹尾貞徳先生、池尻公二先生、山本政弘先生、事務部長の宮田広さん、放射線技師長の田畑信幸さん、看護師の松下眞美子さん、本当にお疲れさまでした。池尻先生と竹尾先生は国立福岡中央病院の時代から勤続されていた最後の先生方です。いわゆる城内の世代がおられなくなったことに時代の流れを感じます。コロナ禍が収まって再会できることを楽しみにしています。皆様お元気で。ありがとうございました。

病院長　森田 茂樹

新たな旅立ちに、感謝を込めて

３月に入り、春の気配を感じるようになりました。今年もこれまで活躍していただいた皆さんとのお別れの時期が近づいてきました。この２年、COVID-19の影響で職員間の院外での活動が制限され、本来であれば職場だけでなく、様々な交流を重ねたいところができず残念でなりません。しかし、その分、COVID-19の対応をはじめ多くの活動で職員間の結束力は深まったとも感じております。そのチームの中心となった皆さんへはねぎらいと感謝の気持ちしかありません。

看護部からは、有馬京子副看護部長、前田志穂看護師長、大力元子看護師長、そして３人の副看護師長が、昇任・配置換にて他施設へ異動となります。

有馬副看護部長は、新たな視点から様々なプロジェクト活動を企画し、患者さんを尊重した取り組みを働きかけてくれました。看護部の先頭に立ち、看護管理者、看護師たちに寄り添いながら、看護の能力向上のみならず、気持ちの面でもサポートしてもらいました。前田看護師長は、救命救急センターの再構築として救急外来の体制整備に取り組んでくれました。その結果、救急患者の受け入れが2021年度大幅に増え、強靭なる救急体制が整備されたと感じております。大力看護師長は、直近の２年間は医療安全管理係長として全部門の医療安全に関するマニュアル作成から対策立案・周知、そして職員の様々な相談に迅速に対応してもらいました。当院の理念である「安全かつ最適な医療の提供」の実践につながったと感謝しております。

近添副看護師長、秋山副看護師長、鍵山副看護師長は、患者看護の実践はもとより、後輩指導に力を注いでいただき、皆さんに次ぐ、看護師たちが育っております。これまでの奮闘にお礼を申し上げます。

さらに、松下真美子乳がん看護認定看護師には、がん看護相談外来、リンパ浮腫外来等で、患者さん方に寄り添う療養支援を行ってもらったこと、山浦智未認知症看護認定看護師には、認知症ケアチームを立ち上げ、認知症にかかる教育の機会を職員へ提供していただいたこと、それぞれの活躍に感謝いたします。

また、お辞めになる方、異動される方、他にも多数おられます。当院のこれまでの診療・看護を支えていただき感謝申し上げます。

当院で得られた経験とあらゆる方々との交流をこれからも最大限に活かし、皆様方の各地、各施設でのご活躍を心より祈念いたします。私たちも、皆様方がかたちにしてくれた寄り添う看護にさらに磨きをかけ、看護の高みを目指していきます。本当にありがとうございました。

看護部長　原田 久美子

退任の挨拶　――場を作る――

約28年、長いようで短い期間でした。

九州がんセンター呼吸器グループで２年間の研修を終え、前身の国立福岡中央病院に31歳の時に赴任しました。国立福岡中央病院には、呼吸器外科も内科もなく、肺癌症例は全て他院へ紹介されていました。

故古山正人先生の元で、血管外科を勉強させてもらい、呼吸器外科医として年２－３例の肺癌手術症例しかない状況でした。内科の先生の末期の肺癌症例を積極的に診ていると、次第に不憫に思われたのか、次第に手術できる症例を紹介してくれるようになりました。ほぼ0からのスタートでしたが、３年経つと手術症例が50例以上となり、胸部外科学会の認定施設になりました。それによって、その頃新病院構想に全くなかった呼吸器内科・外科を、当時の鴛海副院長から作ることを知らされ、ようやく私が働く場ができたと喜んだことを思い出します。

1994年７月国立九州医療センターが開院した時は、39歳で呼吸器外科は私１人、全く不安もなく、「やるぞー」という意気込みだけでした。

当時は、卒後３年目の久留米大学の形成外科医と一緒に手術をしていました。土・日関係なく、毎日朝から夜遅くまで病院にいたので、今の働き方改革が嘘のように思えます。この頃、目標は九州を代表する呼吸器センターを作ることでした。

私が独自の手術方法や、難しい手術に挑戦できたのは、故古山先生との約８年に及ぶ血管外科の手術のおかげと思っています。こうしたビデオを持ってひたすら全国学会や研究会で発表し、九州医療センターの名前を覚えてもらおうと必死でした。

手術症例は順調に増加し、年150例を超えた頃にスタッフが１人増え、200例、250例を超えるごとにスタッフが増えました。そして気づいたら九州で１番多くの肺癌症例を手術していました。また当初から研究できる場を作る為に、色々とデータを集め、３年過ぎる頃から、国際学会へ発表できるぐらいになり、最終的には、英文原著が100以上、英文症例報告が30となりました。昨年開院以来、肺癌手術症例が3000例となりました。次の世代にバトンを渡す役目は、山崎君を中心としたしっかりとした呼吸器外科グループが構築されています。約9年間、幹部として携わってきましたが、当院は才能豊かな幹部スタッフに恵まれています。国立病院九州医療センターが更なる飛躍を遂げることを祈念しています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

副院長　竹尾 貞徳

感謝の気持ちを込めて

この度、定年退職を迎えるにあたり、国立病院・療養所時代から国立病院機構まで42年間支えた頂いた皆さんに心より感謝申し上げます。

振り返れば、昭和55年４月国立ハンセン病療養所に就職し、仕事と学業を両立しながら、４年後に自ら転勤を希望し、福岡の九州地方医務局へ転勤、その後、九州厚生局に至るまで、たくさんの方々と出会い、厳しく時には優しく指導・教育していただき、私の礎を築いていただきました。

九州医療センターでは、企画課長として３年６月、事務部長として２年勤務させていただきましたが、ＭＣセンターの開設や感染症病床の整備・指定、da Vinciやpet-CTなど大型医療機器の導入、数え切れないくらいの整備工事等も大きな問題もなく実施出来たことはひとえに院長はじめ職員の皆さんの多大なご協力のお陰だと感謝しております。

その他の病院での思い出として、福岡東医療センターでは、看護学校とリハ学院の同時閉校と併せて看護大学の開学準備、新病棟整備で多忙を極めましたが、大変貴重な経験でした。長崎川棚医療センターでは「在宅医療支援推進室」を設置し、総括管理者として、機構初の「訪問看護ステーション」の開設、地域包括ケア病棟への転換等急性期から回復期、在宅医療までシームレスな体制の整備に関われたことは、医療分野のみならず、介護の分野まで勉強させていただくよい機会となりました。

特に、この２年間は新型コロナウイルス感染症の流行により、これまで経験したことのない様々な対応が求められましたが、ワンチームで取り組み、乗り越えてきたのは職員の皆さんの底力だと改めて感心させられました。

私にとって、これまでに出会い、支えて頂いた方々が一番の財産であり、これからも忘れることなく、新たにスタートとしたいと思っています。

皆さんにはお身体に十分留意され、ご活躍されるとともに、九州医療センターが益々発展することを心より願っております。

本当にありがとうございました。

事務部長　宮田 広

退官の挨拶

令和４年３月をもちまして定年退官を迎えるにあたり一言ご挨拶を申し上げます。思い返せば平成６年６月開院した当院に赴任した私は「大病院の引越し」「20世紀最後の大病院の開院」「電カルの走りともいうべきオーダリングの開始」など一般の医師がなかなか経験できないようなことを経験させてもらっていましたが、平成８年さらに青天の霹靂ともいうべきことが起こりました。薬害エイズ訴訟和解に基づき、福岡県のエイズ拠点病院ですらなかった当院が突然九州ブロックのブロック拠点病院に指名されたのでした。当時の徳永院長に呼び出されそう告げられた時、はっきり言ってなんのことか全く理解していませんでしたが、その後厚生省、原告団弁護団、当院からなる三者協議の場で「九州はレベルが低い。どうしてくれるんだ。」と言われ、改めて与えられた責任の重さを痛感させられました。それ以降当院は最新の医療を提供するとともに患者さんのプライバシーを守り安心して受診していただけるよう工夫を凝らし、チーム医療を向上させ全人的なケアを行うのみならず、九州の隅々までチームを連れて研修に出向き、また基礎から臨床、医療体制、社会、予防啓発まで種々の研究を行い、九州ブロックにおけるエイズ診療の向上を図ってきました。また平成22年にはAIDS/HIV総合治療センター、コンバインドクリニックを設立し、より一層専門的、多角的医療を提供してまいりました。

薬害被害者対応を含めたいへんなことが多かった仕事でしたが、スタッフに支えられてなんとか無事に定年まで勤め上げることができました。これもやはりチーム医療の素晴らしいところだろうと思いますし、チーム医療は患者さんのためだけでなく、そこで働く人間にとっても大きな意義のあることだろうと思います。これからも九州医療センター全体がひとつの大きなチームとしてより一層社会に貢献していかれるよう祈念しております。

AIDS/HIV総合治療センター /免疫感染症内科　山本 政弘

感謝の思いを込めて

この度、３月末日をもって退官することになりました。

昭和58年４月に国立病院に入職して以来、７回の異動で病院機能に応じた臨床、研究、教育研修を経験し、さらに九州厚生局の併任業務では、特定機能病院ならびに国立機関の医療法における放射線領域の医療行政を担当しました。

当院に赴任した平成31年時は、平成８年以来２度目の勤務で幾星霜を経た九州医療センターは、多様な医療ニーズに応える高い機能を備えた組織に変革していました。平成８年当時は新築移転２年目で、紙カルテ・紙伝票の時代からオーダリングシステム導入の黎明期でした。膨大な時間を費やし部門システムを自分たちで構築したことを今でも鮮明に憶えています。今ではいつでもどこでも必要な診療情報を誰でも共有することができます。また、MRI検査の担当者として、当時最先端の1.5T MRI装置を新規導入しましたが、退職する今年、21年ぶりにそのMRI装置を自ら3.0T MRI装置に更新できたことに感慨深いものを感じます。これらもICTによる医療技術の向上と画像情報処理が年月を経て進展した証ですが、今となっては「あっという間」の出来事のようです。

在職中は病院執行部、診療科医師、看護部、事務部、各部門の皆さんを始め、連携病院、業者の方々、多くの方々にひとかたならぬご協力、ご指導を賜りましたことを心よりお礼申し上げます。そして、部門運営にご協力いただいた放射線部の医師、看護師、クラークの皆さんはもちろんですが、一番の理解者である診療放射線技師の皆さん方に支えられ、今日を迎えることができました。本当にありがとうございました。

令和２年当初から新型コロナウイルスが流行し始め、今では社会や個々人のライフスタイル・ワークスタイルの幅広い場面において急激な変化がありましたが、これを機会に医療現場にも人に優しい環境改善や新しい働き方の普及を願っています。

最後になりましたが、職員の皆様方のご健勝と、九州医療センターの更なる発展を祈念いたします。

放射線診療センター 技術部長　田畑 信幸

退任を迎え；現場の皆さんとともに

“おー、池チャン、あんた、すまんばってん甲状腺ばしちゃらんな？” 忘れもしません。平成元年４月、故古山正人先生からかけられた予想外の言葉でした。私の稀有な？外科医人生のスタートを飾るに相応しい言葉でした。感謝です。福岡中央病院時代はありとあらゆる疾患の患者さんを担当させていただき、忙しくも充実した毎日でした。感謝です。そして“好きな時に思う存分野球やっていいから、土日はゴルフのお留守番しててね”と、朔元則先生から優しい？言葉をかけていただき、早速病院野球部の門を叩きました。以後、小生の長き野球人生の中で最も充実した楽しい時間を過ごさせていただきました。感謝、感謝。九州医療センターに移るとともに消化器・乳腺・甲状腺外科に専門を絞り、まさに八面六臂の活躍？おまけに夕方からは野球の練習、そして土日は試合という毎日。でも、父・夫としては最低で、こんな自分を支えてくれた奥さんに感謝です。感謝、感謝です。そして手術は腹腔鏡の時代へ。“無理！短気なオレには無理”と自覚して、がん診療統括部長に身を転じ、以後、陰の存在であった統括部を何とか陽の当たる場所へ！と動き回った10年間でした。感謝です。今後は“えーっ、嘘でしょ！先生辞めないで！”という有難い声に応える形で４月からも非常勤として火水木の三日間、従来どおりの仕事を続けることになりました。今しばらく宜しくお願いします。

正面玄関を入った瞬間に、な～んかホンワカ、暖かな雰囲気に包まれる錯覚を覚えるような病院。これが僕の理想とする病院像です。いつまでも、どんなに忙しくなっても笑顔を忘れず、“気配り、目配り、心配り”のできる病院を造っていただきたいと心から願っています。

“心は現場にあり”をモットーに、皆さんが少しでも働きやすくなるように日々病院内を歩き回り、“おっ！久しぶり、元気？困ってない？”と顔見知りに声をかけ続けた33年間でした。感謝です。皆さんどうか自分が幸せになることを第一に考えてください。それが達成できて初めて最高の笑顔を患者さんに見せることができます。皆さんお幸せに！お元気で！

人生のひと時を皆さんと共有できたことに心から感謝しています。

※最後に、小生の人生を語る上で外すことのできない大切な３枚の写真をご紹介します。

がん診療統括部部長　池尻 公二

写真１
1990年２月14日。父の最終手術に、朔先生と牛島賢一先生とともに第一助手として立ち会わせて頂いたものです。お心遣いに感謝です。

写真２
2007年３月２日、恩師朔元則先生の最終手術。吉田晃治先生のご配慮で第一助手の栄誉を与えて頂きました。感謝です。

写真３
九州全域から集まってくれた野球仲間たちと。綾部部長と永遠のマネージャー前田孝美さんの送別記念試合での集合写真です。今は亡き部長と古山先生に合掌。感謝です。

消化器専門だけど感染症とともに

3年間お世話になりました。九州医療センターでの全在職期間を合わせると10年になります。前回在職時は、膵・胆道疾患診療の充実を目標とし、トップクラスの施設にまで成長させることができたことはちょっと自慢です。そして今回は感染症に影響された3年間でした。消化器分野ではC型肝炎が治る時代が到来し、それに伴って、肝疾患の入院患者が減り、膵臓・胆道疾患の入院数が逆転するという現象がみられました。以前ではとても考えられないことです。ウイルス性肝硬変・肝癌が稀な病気となる時代がやってきそうです。もうひとつはCOVID-19です。教科書でしか知り得なかった感染症の世界的なパンデミックの渦中に置かれるとは想像できませんでした。そして、まさか自分が感染して入院するとは。感染症の先生方、病棟スタッフの皆様に感謝申し上げます。4月以降もこれまでの経験を生かして精進します。九州医療センターの発展を楽しみにしています。

消化器内科医長　河邉 顕

異動のご挨拶

2016年から6年間お世話になりました。2005年に当院にて脳神経外科医としてのスタートを切らせていただいてからの3年間を合わせますと、合計9年間九州医療センターで勤務させていただきました。2017年からは働き方改革のため従来と比べると勤務は楽になりましたが、それでも手術症例の半数が緊急手術であり忙しいのにもかかわらず多くの研修医の先生が当科をローテートしてくれ、うち1名が九州大学脳神経外科に入局してくれました。九州医療センターでの貴重な経験を4月からの九州大学での勤務で活かしたいと思います。ご指導ご支援いただきました院長先生や幹部の先生、脳血管センターをはじめとした各診療科の先生、手術部、外来、病棟の看護師の方々、臨床工学技士、臨床心理士、事務部門の方々に厚く御礼申し上げます。最後になりましたが、皆様のご健勝とますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。

脳神経外科科長　中溝 玲

九州医療センターでの11年間

私は2011年4月に九州医療センターへ就職しました。泌尿器科医は7名と、かなり大人数であり、それだけに患者数、手術症例も多く、大変ではありましたが多くの経験を積む事が出来ました。特に手術ではここで腹腔鏡の認定医を取得出来ましたし、途中から導入したレーザーでは結石破砕や前立腺肥大症核出手術など数多くを経験しました。

このまま定年まで勤務する予定でしたが、持病である頸椎症の悪化もあり、手術業務への支障も出てきた事から今回の異動を決意しました。これまで患者さんを紹介して頂いた近隣のクリニックの先生方、また院内の諸先生方には大変お世話になりました。4月からは柳川市の財団法人　柳川病院に異動となります。医療センターとはかなり異なった環境にはなりますが、泌尿器科常勤の立ち上げという目的もあり、筑後エリアでの地域医療に少しでもお役に立てたらと思っております。長い間本当にお世話になり有り難うございました。

泌尿器科医長　濵口 益光

5年間ありがとうございました

2016年4月から消化器内科医長として診療して参りましたが、2022年3月末で退職いたしました。私は肝臓が専門ですので、B型肝炎やC型肝炎、脂肪肝などの慢性肝疾患や肝がんの患者さんを主に担当してきました。この場を借りて患者さんをご紹介いただきました先生方に感謝申し上げます。在職中はAIDS/HIV総合治療副センター長やリハビリテーション担当医を併任していたため、専門外のことについても学ぶ機会があり新鮮でした。他科の先生方やコメディカルの方々にはさまざまな場面で助けていただき、誠にありがとうございました。私の仕事上の目標は「診療を通して患者さんをより幸せにすること」です。何が幸せかは人によって違いますし、自分にできることは限られているのでなかなか難しいのですが。今後は久留米で在宅医療に従事する予定です。またご縁があってどこかでお会いすることもあると思いますので、その際はよろしくお願いします。

消化器内科医長　山下 尚毅

２度目の九州医療センター勤務を振り返って

2020年７月から2022年３月まで九州医療センターにて勤務させていただきました。前回は2002年に研修医としてお世話になりました。救急疾患は勿論の事、幅広い疾患の中にも稀な頻度の病変に遭遇する事もしばしばで、画像診断の難しさを痛感すると共に、画像診断医として成長の機会を与えていただき感謝しています。放射線科は単独では成り立たず、他科の先生方とのコミュニケーションにより医療の質向上に寄与する事が出来ると考えており、前回勤務時に比べるとわずかながら貢献が出来たのではないかと自負しています。

森田院長、岡田副院長をはじめ様々な先生方にご助力いただき、短い期間ではありましたが、共同研究を遂行出来たのも、複数科間の障壁が低い事や先進的な医療が推進されている証だと実感致しました。この場をお借りして御礼申し上げます。

放射線科　山下 孝二

異動のご挨拶

この度、菊池病院へ異動することになりました。九州医療センターには３年間お世話になりました。15年ぶりに２度目の勤務であり、今さら急性期病院での勤務が務まるだろうかと心配でしたが、多くの皆様に支えられ無事過ごすことができました。九州医療センターには「患者に寄り添う」ことを実践しようというエネルギーがあります。私も微力ながら「看護師が患者の側でやりたい看護ができる環境を整えること」を目指し、少しでも貢献できたのであれば幸いです。

長くもあり、短くもある３年間でしたが、九州医療センターという大きな船で皆様と一緒に船旅ができたことはとても楽しい思い出です。ご指導いただいた皆様、一緒に過ごしていただいた皆様に感謝申し上げます。これからの九州医療センターのご発展と皆様のご健勝をお祈り申し上げます。

副看護部長　有馬 京子

異動のご挨拶

２年間と短い間ですが、様々な経験をさせていただきました。

その一つとして新型コロナ対応で院内クラスター発生時から着目されていた「換気問題」は病院建物設備のメンテナンスの大切さを学びました。

次に経営面では、令和２年度は院内クラスターの影響により厳しい状況でしたが、今年度はコロナの影響がありながらも医業収支は３億円以上の黒字となる見込みです。これは一重に職員の皆様の協力とともに、「九州医療センターの底力」を見たような気がします。

新年度からはハイブリッド手術室改修工事を始めとする複数の工事や電子カルテ更新と大きな整備が目白押しですが、引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

最後となりますが、九州医療センターの益々の発展と皆様のご活躍を祈念して異動の挨拶とさせていただきます。お世話になりました。

企画課長　丸山 誠二

異動のご挨拶

このたび、４月１日付で福岡病院へ異動することとなりました。2019年に九州医療センターへ赴任し、3年間勤務させていただきました。当時は平成から令和へ変わる明るい話題の頃で、博多どんたく港まつりや古湯フォーラム、めでぃかる会と職員が交流する行事も多く、他部署のみなさんとも早く馴染んでいけたことを覚えています。2020年になると新型コロナウイルス感染症が蔓延し、状況が一変してしまいました。一般診療を行いながらのコロナ対応で、医業収支に大きな影響がありましたが、それ以上にスタッフの苦労は計り知れないものがあったと思います。様々な出来事がありましたが、職員一丸となって懸命に立ち向かったからこそ乗り越えられたと思います。

最後に職員の皆様と九州医療センターの益々のご発展を祈念して異動の挨拶に代えさせていただきます

経営企画室長　一ノ瀬 真由美

異動のご挨拶

この度、地元の西別府病院へ異動となりました。この病院では４年間お世話になりました。

私の中で４年間は前半、後半と二分され、前半は着任して早々の早期離床・リハチームの立ち上げへの関わり、病院機能評価受審への対応や様々な行事で忙しく過ごした２年間、そして後半の２年間はコロナ対策本部の方々の感染対策へのご苦労を目の当たりにしながらリハビリの役割を模索した２年間。その中でコロナ病棟への介入を経験させていただき、患者満足の面では微力ながら貢献させていただいたと自負しています。

この４年間は夢のような時間でした。この施設での勤務経験を誇りにし、新任地でも学びを活かしていきたいと思います。

最後に職員皆様のご健勝と九州医療センターの益々の発展を祈念して異動の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

リハビリテーション部　理学療法士長　梶原 秀明

新臨床研修医へ贈る言葉

臨床教育研修センター長
冨永　光裕

この春、医師国家試験に合格され、当院で医師としての第一歩を踏み出される皆さんにお祝いを申し上げます。これからの２年間は、医師・社会人としての人格を涵養し、基本診療の能力と医師としての基本的価値観（プロフェッショナリズム）を培う重要な２年間です。昨年度からは、必須教育研修プログラムに加え一般外来研修や在宅医療研修も追加され、より充実した研修プログラムとなっております。診療にあたる患者さんや医療スタッフとの出会いを糧とし、将来自分が目指す医師像を描きながら、最後までモチベーションを維持して、積極的に研修に取り組まれてください。無事に２年間の研修を修了され、笑顔で次のステップへ進んでいただきたいので、当センターは、昨年度の反省を踏まえ、例年より厳密に研修内容を管理し、皆さんをサポートしたいと思っています。

新研修医の皆さん
医師国家試験合格おめでとうございます　そしてようこそ九州医療センターへ

川本　聡

６年間の学生生活は覚えることも多く大変だったと思います。これからは皆さんが得た知識を実践で生かしていく時です。研修医としての２年間はこれから皆さんの進路にかかわらず医師生活で最も重要な２年間であることと思います。どうぞこの時期しか経験できないような貴重な経験を当院で積んで下さい。九州医療センターは数多くの切磋琢磨しあえる同期やあたたかい先輩方が多い環境であり、２年間を充実させるには最高の環境が整っています。ぜひこういった環境を最大に活用してください。最後になりますが皆さんの医師としてのスタートが順調でありますように心からお祈り申し上げます。人生でかけがえのない２年間にしてください。

新研修医の皆さん、九州医療センターへの入職おめでとうございます

野田 貴美子

新研修医の皆さん、国家試験合格、そして九州医療センターへの入職おめでとうございます。医師としての一歩を踏み出す皆さんは最初は右も左も分からない事ばかりで不安も大きいと思いますが、先生方の指導や沢山の同期、先輩たちを頼ってご自身の力を精一杯発揮してください。私はこの九州医療センターで同じように色々な人たちの力を借りて２年間を過ごし、知識だけではないたくさんのことを学びました。困難な時や辛いときの経験が自分の糧になったと感じています。特にコロナ禍という大きな社会の変化の中、その最前線である病院で働いた経験は大切なものだと感じています。そのような環境が揃った九州医療センターで、皆さんが大きく成長できるよう期待しています。そして成長した皆さんとどこかで一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

新臨床研修医の皆さん、国家試験合格および当院へのご就職おめでとうございます

山本　圭亮

研修医としての新生活を前に期待を抱きつつ、不安な気持ちも大いにあることと思います。私も初めは新社会人として、また医師として分からないことや不安なことばかりでしたが、多くの方々にお力添えいただいたおかげで、研修生活を終えることができました。九州医療センターでは、幅広い診療科で経験を得て、沢山の先生方にご教示いただき、同期たちと学習し、切磋琢磨しあうことができます。知識や手技などの勉強にあたって、セミナーや講義が多く開催されるだけでなく、先生方や研修医の先輩方が優しく、相談・質問しやすいため、整った学習環境で研修することができました。皆さんにとっても、楽しく、実りのある２年間となることを心よりお祈りしております。

さわやかナーシング

病院見学会を開催しました

担当看護師長　吉村佳也子

看護部では看護学生を対象とした病院見学会を開催しています。
新型コロナウイルス感染防止の影響から、看護基礎教育において臨地実習が中止または制限されています。
看護師になることを夢見て頑張っている学生に、「私たちの病院を知ってもらいたい！」「一緒に働きたいと感じてもらいたい!!」との思いから、企画・運営しました。2月、3月は約70名の方に参加していただきました。

スケジュール

1. 病院・看護部紹介
2. 院内見学（外来・病棟）
3. 病棟看護師との意見交換
   病棟看護師や認定看護師が学生の質問に回答し経験も語りました
4. COVID-19関連の看護体験談
   妊産褥婦への看護体験を語りました

感想

■コロナの影響で実習ができず、実際に病院の中を見たり看護師と話す機会がなく不安でしたが、病院の中を知ることができて大変参考になりました。

■実際に見学し、より詳しく九州医療センターを知る事ができました。

■九州医療センターに入職したいという思いが強くなりました。

SAWAYAKA NURSING

始めます!!
看護師の特定行為研修

教育担当師長　中村千夏子

特定行為研修指定研修機関に、九州医療センターが指定されました

高度な臨床実践能力を発揮し、チーム医療のキーパーソンとして機能できる看護師を育成します。

九州医療センターで実施する特定行為研修

領域別パッケージ

- 術中麻酔管理領域（８行為）
- 救急領域（９行為）
- 外科系基本領域（７行為）

＋

特定行為区分

- 血糖コントロールに係る薬剤投与関連

※研修期間：９か月

特定行為研修指定研修機関指定証

令和４年２月28日

厚生労働大臣　後藤茂之

2022年６月より九州医療センターで看護師の特定行為研修を開始します。
特定行為研修を修了した看護師が高度な臨床実践能力を発揮することで、チーム医療の中心となり、患者の診療と生活を支援します。
また、地域医療にも急性期から在宅医療までを支える人材を育成し、貢献していきたいと考えます。

No.97

ヒポクラテスのカフェ

“食物連鎖：タケノコの話”

NHO 都城医療センター　吉住 秀之

王維も好んで竹藪の中に蚊帳を釣らずに寝た男でもなからう。やはり余つた菊は花屋へ売るかして、生えた筍は八百屋へ払ひ下げたものと思ふ。

（夏目漱石『草枕』）

「竹笋生（たけのこ生ず）」とは、七十二候の一つです。二十四節気の立夏の末候にあたり、５月16日～５月20日頃に相当します。本家の中国では、「王瓜生」とされ、からすうりの実がなり始める頃となっていますが、日本ではタケノコが昔からこの季節にしっくりと来る風物詩だったのでしょう。漱石が『草枕』の中で言及していた王維は、竹をこよなく愛し別荘の敷地内に竹里館を構え、俗世間を超越して漢詩を詠みました（彼は生涯に二十八首の竹の詩を残しています）が、タケノコをどんなふうに料理して食べていたのでしょうか。

タケノコは、掘りだしたらなるべく早く茹でて、あく抜きするようにといわれます。これはタケノコに豊富に含まれるチロシン（タケノコの節に見られる白い粉状のもの）が酵素作用でホモゲンチジン酸（えぐみの素）になるためです。あく抜きにはアルカリ性の水の方がよいので、米のとぎ汁や重曹水が使われます。

ホモゲンチジン酸といえば、生化学に明るい医師であれば、アルカプトン尿症を連想するでしょう。この疾患は、ホモゲンチジン酸-1,2-ジオキシゲナーゼの遺伝的欠損によりホモゲンチジン酸からマレイルアセト酢酸への転換ができなくなる結果、尿中にホモゲンチジン酸（アルカプトン）が排泄される常染色体潜性（劣性）遺伝の疾患です。先天性代謝異常症ではありますが、生後すぐに死亡するようなことはなく、後年関節炎や心臓弁膜症が現れたり、前立腺結石や腎結石を併発したりします。この病態で現れる尿が黒変するという所見は、16世紀頃から知られていたのですが、19世紀になってからその原因物質がホモゲンチジン酸であることが判明します。イギリスの医師アーチボルド・ギャロッド（1857-1936）は、アルカプトン尿症の家系内発症がメンデルの法則で説明できることを1902年にランセット誌に報告しました（メンデル法則の再発見が1900年であることを考えると洞察の鋭さに驚きます）。彼は、1909年『先天的代異常』を著し、人の顔かたちに差異があるように化学的代謝過程にも遺伝にもとづく個人差があることを見抜き、これが疾病の原因となりうることを主張しました。今では当たり前のことですが、当時正当な評価はされないまま1936年に亡くなります。1941年ジョージ・ビードルとエドワード・テータムによる「一遺伝子一酵素説」が発表されて、彼の先駆的業績は輝き出します。先天性代謝異常の章が内科学の代表的教科書に設けられたのは、ハリソン内科学で1950年、セシル内科学で1951年のことでした。1953年にDNAの二重らせん構造が明らかにされ、今やゲノミクスからメタボロミクスの時代となり、少し目を離していると雨後の筍のように新しい知見が次から次に顔を出しますので、うかうかしていられません。

NPO法人卒後臨床研修評価機構受審を終えて

昨年12月２日にNPO法人卒後臨床研修評価機構（JCEP）の認定更新の訪問調査を終えることが出来ました。JCEPの初回認定を受けたのは４年前であり、数多くの改善すべき箇所を指摘されていました。２年前の書類調査（改善報告）を経て、今回２回目の訪問調査でした。当センターのJCEP受審の経験者は副師長のみという体制で、JCEP認定更新へ向けての準備がスタートしました。まずは、２年前の書類調査のなかで改善に向け検討中とした項目から当センターで検証し、それに合わせて臨床研修マニュアル、初期臨床研修プログラムの改訂作業にも着手しました。手つかずのままの箇所も多くあることに気づき、内容によっては臨床教育研修委員会での議論を必要としました。さらに５月には院内関係各所の協力によりプロジェクトチームの立ち上げ、１－２か月毎にプロジェクトチーム会議を開き、訪問調査日までの準備状況の説明と確認を繰り返しました。

当センターとして看護教育研修、初期臨床研修の通常業務等への対応に加えての作業でしたので、かなりの負荷となりました。しかしながら、当センターが行っている卒後臨床研修内容の再確認と修正を行うことができ、院内関係各所へのその内容周知がなされた良い機会でもあったと実感しました。また、さらに改善すべき箇所の指摘をいただきましたので、今回は遅滞なく改善作業に取り組んでおります。ご協力いただいた院内関係各所、診療科科長、指導医の方々に感謝を申し上げます。

認定番号 Pa0230-6

Japan Council for Evaluation of Postgraduate Clinical Training

JCEP 認定証

Certificate of Accreditation Postgraduate Clinical Training Program

独立行政法人国立病院機構

病院名　九州医療センター　殿

貴病院は特定非営利活動法人 卒後臨床研修評価機構の定める認定基準を達成していることを証します

認定（4年）

有効期間
2022年2月 1日から
2024年1月31日まで

発行日
2022年2月1日

特定非営利活動法人 卒後臨床研修評価機構
Japan Council for Evaluation of Postgraduate Clinical Training

理事長 高久史麿
評価委員長 有賀 徹

臨床教育研修センター　冨永　光裕

人事の動き

令和４年３月２日～令和４年４月１日

医療職（一）

就任	脳神経外科医長	溝口　昌弘	退任	副院長	竹尾　貞徳
	消化管外科医長	上原　英雄		AIDS/HIV 総合治療センター部長	山本　政弘
	放射線科医長	松浦　秀司		がん診療統括部長	池尻　公二
	消化器内科医師	三木　正美		消化器内科医長	河邉　顕
	心臓外科医師	鈴木　理大		放射線科医長	山下　孝二
	麻酔科医師	井村　一也		脳神経外科医長	中溝　玲
	整形外科医師	原　正光		代謝内分泌内科医師	中尾　裕
	産科医師	前原　佳奈		代謝内分泌内科医師	髙柳　宏樹
	泌尿器科医師	波止　亮		消化器内科医師	肱岡　真之
	消化器内科医師	田代　茂樹		消化器内科医師	山下　尚毅
	呼吸器内科医師	松尾　規和		消化器内科医師	井星陽一郎
	消化管外科医師	蓮田　博文		呼吸器内科医師	坂元　暁
	眼科医師	山名　智志		呼吸器内科医師	矢野　千葉
	皮膚科医師	西尾紀一郎		小児科医師	桐野万起子
	消化器内科医師	佐々木泰介		精神科医師	真武　徳至
	心臓外科医師	藤本　智子		放射線科医師	大島　健史
	小児科医師	藤吉　順子		消化管外科医師	南原　翔
	婦人科医師	庄　とも子		肝胆膵外科医師	池田　貴裕
	代謝内分泌内科医師	勝原　俊亮		肝胆膵外科医師	佐々木　晋
	泌尿器科医師	岡田　達憲		乳腺外科医師	杉原　利枝
	歯科口腔外科医師	沖永　耕平		脳神経外科医師	麦田　史仁
	呼吸器内科医師	児嶋　隆		脳神経外科医師	村田　秀樹
	精神科医師	髙橋　潤一		心臓外科医師	野村　竜也
	肝胆膵外科医師	釘山　統太		心臓外科医師	平田雄一郎
	代謝内分泌内科医師	堀内由布子		心臓外科医師	元松　祐馬
	肝胆膵外科医師	内野　馨博		血管外科医師	今井　伸一
	乳腺外科医師	松嶋俊太郎		整形外科医師	嘉村　聡志
	脳神経外科医師	雨宮　健生		泌尿器科医師	白石　航一

医療職（一）

就任	血管外科医師	吉野伸一郎	退任	泌尿器科医師	濵口　益光
	麻酔科医師	岩松有希子		眼科医師	舩津　淳
	麻酔科医師	井ノ上有香		皮膚科医師	原田　佳代
	救命救急科医師	林　哲也		産科・婦人科医師	杉浦多佳子
	形成外科医師	古賀　文貴		産科・婦人科医師	早瀬　千尋
	放射線科医師	久貝美由紀		形成外科医師	中村依利香
	脳神経外科医師	宮﨑　貴大		麻酔科医師	織田　寛子
	免疫感染症内科医師	中嶋恵理子		麻酔科医師	久保田　諒
				麻酔科医師	江藤　彩
				麻酔科医師	新原　妙子

医療職（二）

就任	副薬剤部長	大橋　邦央	退任	副薬剤部長	川俣　洋生
	診療放射線技師長	大浦　弘樹		診療放射線技師長	田畑　信幸
	副臨床検査技師長	渡辺　秀明		副臨床検査技師長	藤野　達也
	副栄養管理室長	青堀　尚子		副栄養管理室長	松井　智美
	理学療法士長	田中　正則		理学療法士長	梶原　秀明
	副理学療法士長	山本祐紀恵		副臨床工学技士長	富永　圭一
	臨床工学技士長	田代　博崇			

医療職（三）

就任	副看護部長	養田　尚美	退任	副看護部長	有馬　京子
	看護師長	金子　大佑		看護師長	前田　志穂
	看護師長	髙山有美子		看護師長	大力　元子

事務職

就任	事務部長	佐々木豊光	退任	事務部長	宮田　広
	管理課長	海崎　健也		企画課長	丸山　誠二
	経営企画室長	橋本　裕二		経営企画室長	一ノ瀬真由美
	専門職	山梨　祥吾		専門職	武田　竜太

編集後記

表紙は３月27日に西公園の光雲神社の石段から見た桜です。また右下はペイペイドームのホークスガーデンから見た九州医療センターです。

副編集委員長　占部　和敬

KMC NEWS No.99をお届けいたします。ご退任・ご異動で当院を離れられた皆さま、永きに渡り本当にありがとうございました。新しい環境での益々のご活躍を祈念いたします。一方、新たに入職された皆さまには心よりお慶び申し上げます。コロナ禍でまだまだ予断を許さない状況が続いていますが、当院のルールをしっかりと把握して、持てる力を存分に発揮して頂きますようお願いいたします。

編集委員長　岩﨑　浩己

医事統計　患者数・診療点数の推移

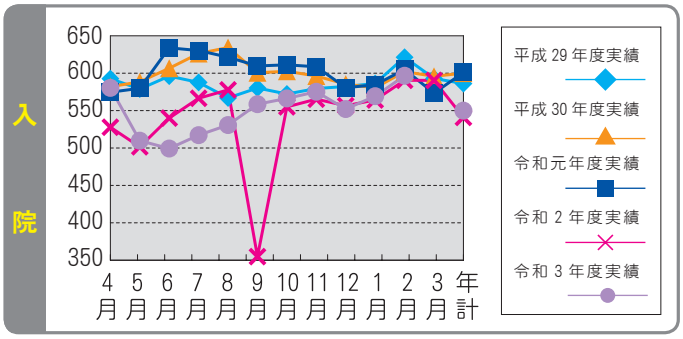
■令和３年度は、月平均在院患者数596人と、病床利用率85%達成に向けて取組んで行きましょう！（令和４年２月現在の暫定値）
外来新患者数は、今年度２月までの実績で18,358名と前年同月までと比べ1841件の増となっています。今年度も、新紹介患者の確保と逆紹介の推進が重要となります。１日平均外来患者数は、２月までの実績で885.9名と昨年同月までの実績（835.1名）と比較して50.8名の増となっております。
１日平均入院患者数は今年度２月までの実績で550.0名と昨年同月までの実績（536.3名）と比較して13.7名の増となっております。新入院患者数は２月までの実績で昨年度同月までと比較すると984名の増となっております。平均在院日数につきましては、昨年度と比較して0.6日減って12.4日となっております。
入院１人１日当たり診療点数は、今年度２月までの実績で8,098.5点と昨年の実績と比較すると205.9点の増となっております。外来１人１日当たり診療点数については、今年度２月までの実績で3,269.3点と昨年同月までの実績と比較して104.6点の増となっております。
紹介率は、２月までの実績で93.9%となっております。

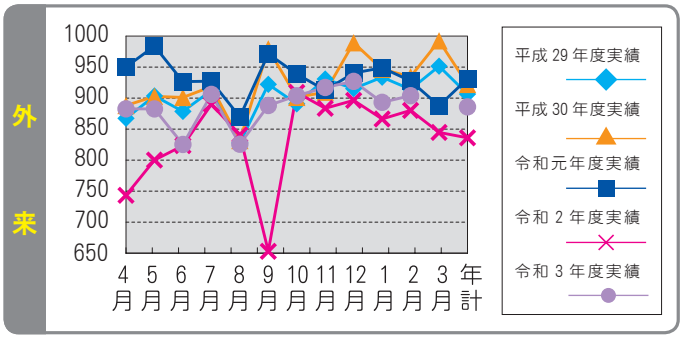
一日平均入院患者数（在院）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成29年度実績	592.7	578.8	596.1	587.7	566.9	580.2	572.2	579.5	582.3	586.2	621.3	593.0	586.1
平成30年度実績	581.9	588.5	606.6	626.3	634.3	600.6	602.6	596.2	585.4	580.4	602.1	595.8	600.1
令和元年度実績	574.6	579.8	633.9	630.3	621.4	609.7	611.2	608.6	580.7	584.4	605.0	573.3	601.0
令和２年度実績	527.8	501.6	540.0	566.5	577.7	354.8	555.0	565.3	556.5	564.2	590.5	590.4	540.9
令和３年度実績	580.4	509.8	499.3	517.2	530.7	558.6	566.3	575.2	552.1	569.3	596.6		550.0

一日平均外来患者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成29年度実績	867.4	903.5	878.6	912.4	827.7	922.2	890.7	930.8	915.3	933.7	914.2	951.5	906.5
平成30年度実績	888.1	902.8	901.1	918.6	831.7	979.4	901.2	909.6	989.3	946.6	934.5	992.4	922.1
令和元年度実績	950.2	983.9	926.6	927.3	869.6	971.4	938.9	912.7	940.5	948.9	927.7	887.7	931.2
令和２年度実績	743.3	800.1	823.4	889.9	840.8	653.0	909.2	883.6	896.4	866.4	880.2	844.7	836.0
令和３年度実績	882.7	882.6	825.3	906.0	825.7	888.1	903.8	917.2	927.0	893.2	903.9		885.9



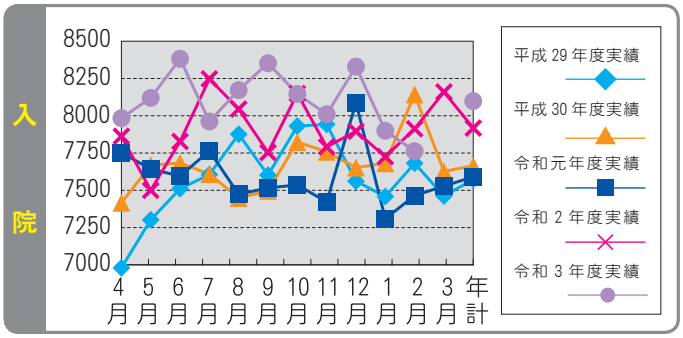


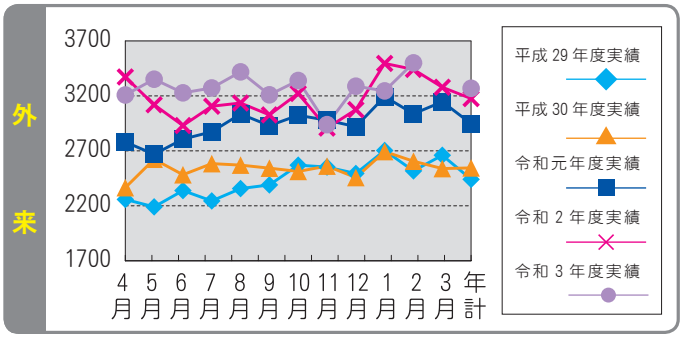
入院１人１日当り診療点数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成29年度実績	6,980.0	7,301.8	7,511.0	7,605.5	7,875.8	7,601.8	7,930.5	7,942.5	7,561.4	7,458.4	7,681.2	7,461.5	7,573.9
平成30年度実績	7,416.3	7,668.2	7,683.2	7,608.8	7,448.6	7,496.7	7,823.6	7,758.6	7,652.4	7,681.2	8,143.1	7,627.6	7,663.8
令和元年度実績	7,752.0	7,642.8	7,595.5	7,764.1	7,472.8	7,516.6	7,535.3	7,422.6	8,086.5	7,309.2	7,464.6	7,528.1	7,590.5
令和２年度実績	7,862.5	7,500.1	7,827.7	8,247.6	8,044.8	7,753.7	8,149.1	7,791.3	7,895.8	7,725.7	7,912.4	8,159.6	7,917.4
令和３年度実績	7,983.7	8,119.7	8,381.9	7,961.4	8,172.2	8,352.7	8,146.2	8,010.4	8,329.4	7,899.1	7,762.5		8,098.5

外来１人１日当り診療点数

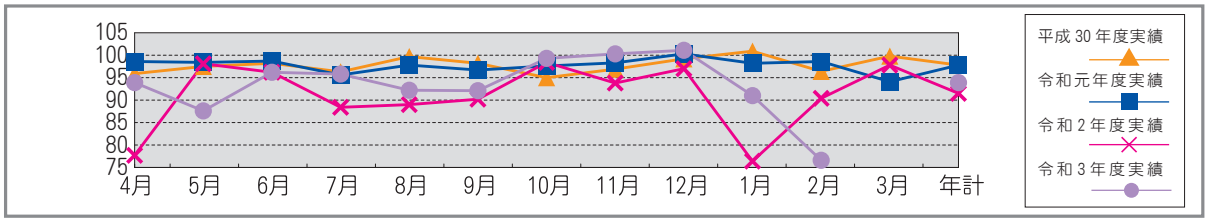
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成29年度実績	2,258.2	2,190.4	2,338.6	2,244.3	2,356.8	2,390.1	2,569.8	2,552.4	2,494.2	2,703.5	2,517.6	2,659.9	2,441.0
平成30年度実績	2,365.1	2,623.8	2,482.6	2,583.8	2,570.3	2,542.5	2,512.8	2,561.2	2,457.2	2,693.5	2,605.6	2,538.8	2,544.8
令和元年度実績	2,780.4	2,669.1	2,806.7	2,873.5	3,035.4	2,929.2	3,023.6	2,978.7	2,920.1	3,193.5	3,037.1	3,146.7	2,947.4
令和２年度実績	3,372.3	3,119.3	2,930.1	3,105.9	3,135.4	3,027.2	3,222.5	2,907.3	3,074.9	3,495.5	3,441.0	3,278.8	3,175.6
令和３年度実績	3,208.4	3,351.9	3,227.9	3,272.2	3,418.7	3,209.9	3,340.1	2,938.5	3,288.3	3,245.5	3,500.6		3,269.3





紹介率推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
平成30年度実績	95.9	97.5	98.2	96.3	99.7	98.2	95.0	96.9	99.2	100.9	96.4	99.8	97.8
令和元年度実績	98.6	98.4	98.7	95.6	97.8	96.7	97.6	98.3	100.3	98.2	98.6	94.1	97.8
令和２年度実績	77.7	98.1	96.2	88.4	89.0	90.2	98.4	93.8	97.0	76.4	90.4	97.8	91.5
令和３年度実績	93.9	87.6	96.2	95.8	92.2	92.1	99.3	100.3	101.1	91.0	76.6		93.9



株式会社 陽 文 社　福岡市博多区那珂５丁目7-37　TEL（092）412-7331　FAX（092）412-7332

発　行　独立行政法人 国立病院機構 九州医療センター　広報誌編集委員会
〒810-8563 福岡市中央区地行浜 1-8-1　TEL 092-852-0700　FAX 092-847-8802